ネオ・ヒューマンは人間の夢を見るか？
——ウエルベックにおける安楽死の誘惑と鎮静の技法

熊谷謙介（神奈川大学）

ウエルベックではなくゴダールの話から始めたい。映画監督ジャン=リュック・ゴダールは 2022 年 9 月 13 日、スイス・ロールにおいて 91 歳で亡くなったが、スイスで法的に認められている自殺幇助によって最期を迎えたことが伝えられた。「彼は病気ではなく、ただもう疲労困憊していた。Il n'était pas malade, il était simplement épuisé.」[1]という周囲の証言が、安楽死を認めるハードルの低さを露呈し、それに反論するかのように、ゴダールの安楽死を実行した団体「エグジット Exit」が、ゴダールが実際には日常生活に支障をきたすような多重疾患にかかっていたことを訴えるなど[2]、その死をめぐってはさまざまな意見が見られる。「安楽死、是か非か」という議論から距離を置いて、「死はプライベートなものであり、他人が口出しすることではない」とする意見もまた、安楽死に対してある一方の立場に与するものとなるだろう。『安楽死を遂げるまで』などで著名な欧州在住のジャーナリスト宮下洋一が取材した、エグジットの関係者の証言によると、ゴダールは当日の朝、パートナーのミエヴィル、友人、エクジットの看護師が見届けるなか、致死薬入りの水を看護師から手渡され、別れの言葉も告げずに一気に飲み干し、六〇秒後に息をひきとったとのことである[3]。

こうした安楽死や自殺幇助に対して、ウエルベックは一貫して反対を唱えてきた。『ル・モンド』や『フィガロ』などの大新聞で安楽死反対の論陣を張り、ヴァンサン・ランベール事件（交通事故によりいわゆる植物状態に陥った患者に対して、病院側は妻の同意を得つつも両親には知らせることなく栄養補給の停止を行い、両親から訴えられた事件）に対しても、批判の意見を表明している。後者の文章は『介入 *Interventions*（邦訳では「発言集」）』と題された、その都度の社会状況に応じて書かれた論考集に収められていることからも、ウエルベックの「表明」という態度は明確であろう。

一方、現代社会を呪詛するかのような語り、そして作品内の登場人物がことごとく自殺に近い形で生涯を終える陰鬱なイメージを考えるならば、ウエルベックのこのような「人道主義」にも見える立場は意外に思われるかもしれない。デビュー作となった評論『H・P・ラヴクラフト——世界と人生に抗って *H.P. Lovecraft : contre le monde, contre la vie*』（1991）のタイトルを借りるならば、ここでのウエ

---

[1] « Sa décision - Jean-Luc Godard a eu recours au suicide assisté : «Il n'était pas malade, il était simplement épuisé» » (*Libération*, 13 septembre 2022) https://www.liberation.fr/culture/jean-luc-godard-est-mort-20220913_LLEGXZFQS FDC3FBJCP7AWXSYWI/〔執筆者確認 01/18/2023〕

[2] Aïna Skjellaug, « Jean-Jacques Bise, coprésident d'Exit : «Jean-Luc Godard n'était pas "épuisé", mais malade» » (*Le Temps*, 17 septembre 2022) https://www.letemps.ch/suisse/jeanjacques-bise-copresident-dexit-jeanluc-godard-netait-epuise-malade ; « Exit tient à rectifier pourquoi Jean-Luc Godard a fait appel à eux » (*Tribune de Genève*, 17 septembre 2022) https://www.tdg.ch/exit-tient-a-rectifier-pourquoi-jean-luc-godard-a-fait-appel-a-eux-973228456111 〔執筆者確認 01/18/2023〕

[3] 宮下洋一「「死ぬ権利とは何かー欧州「安楽死」事情」『世界』二〇二二年十二月号、一二四ー一二九頁。

ルベックは（人）生に抗うのではなく、（人）生に抗うことに抗っているようにも見える[4]。他方、これも最初期のエッセイである『生きてあり続けること *Rester vivant*』（1991）の最初の章は「はじめに苦しみあり（D'abord, la souffrance）」と題され、「世界とは苦しみが広がっていく場所である。その起源には苦しみがとぐろを巻いている」という章句から始まる。しかしながら次の章では「自殺は何も解決しない。ボードレールが 24 歳で自殺の企てを遂行してしまったならと想像してみたまえ」、さらに次の章では「死んだ詩人はもはや書かない。そこから生きてあり続けることの重要性が生まれる」と書き添えることを忘れておらず、まさにタイトル通り、死なないでいること、『悪の華』の詩人の言葉を用いれば「生きることの責め苦を受け condamné à vivre」[5]続けることを読者に呼びかけているのである。

このように一見矛盾して見えるウエルベックの態度——苦しみに満ちた世界に存在しながらも、そこから逃れるための「出口」として死を置かないこと。安楽死や自殺を繰り返し描きながらも、生きてあり続けることで見える世界に美を見出すこと——をときほぐすことが、本稿の目的となる。ウエルベックにおける死、そして死について思念を巡らせる作品や宗教的枠組みの美学的・倫理的意味については、すでに多くの論が存在する。現在のウエルベック研究の代表者ともいえるアガト・ノヴァク=ルシュヴァリエは『ウエルベック、慰めの技法』において、「ウエルベックの小説が自殺の弁明であることは決してない」[6]と断言している。本稿でも議論をするクローン技術を死の超越という問題系に含めるならば、ウエルベックにおけるポストヒューマンというテーマも重要な先行研究となるだろう。また自殺に限定するのであれば、ロラ・アルコゼール・クズコが 2021 年にオスロ大学に提出した修士論文、「ミシェル・ウエルベック『地図と領土』における自殺」は参照すべき研究である[7]。本稿に独自性があるとすれば、自殺一般ではなく安楽死に焦点を当てることにあり、多くの作品、とりわけ現時点での最新作である『無化 *Anéantir*』（2022）も分析対象に組み込むことで、例えば『闘争領域の拡大』に見られる「平坦な生」から、クローンなどの遺伝子工学をモチーフとする『素粒子』（1998）、『ある島の可能性』（2005）、宗教に対する問いかけを正面に据えた『服従』（2015）、『セロトニン』（2019）を経て、家族や人どうしの繋がりへの回帰とも見られなくもない『無化』に至るまで、変容しているように見えながらも、常に作品の背景に存在するウエルベック特有の死生観を浮かび上がらせることが目標となる。

ウエルベックにおける自殺について考えるための補助線として、ショーペンハウアーを導入したい。

---

[4] 冒頭は次のようなものである。「人生は苦しみと失望に満ちているものだ。したがって、あらたなリアリズム小説を書くことは無益である。」*H.P. Lovecraft : contre le monde, contre la vie* (1991), J'ai lu, 1999, p. 7.（『H・P・ラヴクラフト——世界と人生に抗って』星埜守之訳、国書刊行会、二〇一七年、三九頁。）本稿では刊行地の記述を省略する。またウエルベックの作品については著者名を省略し、再掲の際には「*op. cit.*/ 前掲書」を省略する。

[5] Baudelaire, *Œuvres complètes I*, éd. Claude Pichois, Bibliothèque de la Pléiade, 1975, p. 438.

[6] Agathe Novak-Lechevalier, *Houellebecq, l'art de la consolation*, Stock, 2019, p. 236.

[7] Laura Alcoser Cuzco « Le suicide dans *La Carte et le territoire* de Michel Houellebecq » https://www.duo.uio.no/handle/10852/88379

彼のショーペンハウアー熱は『ショーペンハウアーとともに *En présence de Schopenhauer*』という翻訳・評論でも知られるところだが、原語のタイトルに示唆的なように、必ずしもショーペンハウアーに付き従う弟子としてではなく、この 19 世紀の哲学者が突き当たった問題を 21 世紀において考えるという観点から、ゲームの対局をするかのように指し手を交し合う関係と言ってよいだろう。ショーペンハウアーには自殺についての考察があるが、「すべてのものは生きようとする意志に突き動かされるが挫折を強いられ、あとに残るのは苦しみのみであり、意志を否定する境地に至るしかない」というペシミズムに彩られた世界観を提示する哲学者は意外にも、自殺に対しては否定的なのである。

> 意志のこの否定は、自殺、すなわち意志の個別現象を自分勝手に廃棄してしまうこととは、厳密に区別されなければならない。自殺は意志の否定であるどころか、むしろ意志の強烈な肯定のひとつの現象である。なぜなら意志を否定するということの本質は、苦悩の嫌悪のうちにあるのではなしに、人生の享楽を嫌悪することのうちにあるのだからである。もともと自殺者は生を欲しているのだ。自殺するのはただ、現在の自分の置かれている諸条件に満足できないというだけの話なのである。だからして自殺者はけっして生きんとする意志を放棄するのではなく、ただ単に生を放棄して、個別の現象を破壊するにとどまっている。[8]

すなわち、自殺は意志から脱け出そうとするのではなく、それ自体が意志に突き動かされた行為であり、実際には生に執着することに起因する、欲望を脱しきれない自我の営みにすぎない、という論である。一方、もし認められる自殺の形態があるとすれば、生きようとする意志を完全になくしたものであり、食物を摂取するという気力も失って「自然に」餓死に至ることを挙げている[9]。こうした視点から見れば、『セロトニン』の最後、口座に残された金がいつなくなるか、そして抗鬱剤キャプトリクスがいつ利かなくなるかを測りながら、生が消尽していくかのようなフロランの道行きは、ある種これに相応するものとも言える。

---

[8]『意志と表象としての世界 III』（第 4 巻、第 69 節）西尾幹二訳、中公クラシックス、二〇〇四年、二一〇頁。

[9] 本稿で論じられる範囲を超えるが、自殺を否定するショーペンハウアーとウエルベックにおいてむしろ見いだされるのは、現在盛んに議論されている反出生主義なのかもしれない。「そもそも生まれてくるべきではなかった」という観点は、自殺とは別の観点から考察されるべきものだろう。ここでは両者による、反出生主義が色濃い言葉を引用するにとどめる。

「それにしても、思慮深く同時に誠実な人であれば、その生涯の終りに際して自分の人生をもう一度繰り返したいなどとはけっして望まないだろう。むしろそんなことをするくらいなら、まったく存在しないことを選ぶ方がまだしもはるかにましだと思うことだろう。」（ショーペンハウアー、同書（第 4 巻、59 節）、三七頁。）

「僕は人間の苦悩を知っているからこそ、他者とつながりのない世界に参加している。僕は静寂への回帰を果たそうとしている。僕は、他の連中よりずうずうしい、防護フェンスのあたりでいつまでもぐずぐずしている野人を殺すことがある〔……〕。人間という種は絶滅する。〈至高のシスター〉の言葉を破綻させないためにも、彼らは絶滅すべきだ。」（ネオ・ヒューマンであるダニエル 24 の言葉）（*La Possibilité d'une île* (2005), j'ai lu, 2013, p. 67（『ある島の可能性』中村佳子訳、河出書房新社、二〇〇七年、六〇頁。）

一方、この抗鬱剤のモチーフによって浮かび上がるのは、世界を鎮静剤としてみる視点であるように思われる。ここにもまた、ショーペンハウアーの独特な用語法が影を落としているのではないか。

> 生きんとする意志の否定が見られる場合というのは、意欲がいま述べた認識〔意志の本質を表象として認識する〕において終わりを告げるときである。そのときには認識された一つひとつの現象は意欲の動因としてはもはや作用することがなく、意志の反映である世界の本質の認識がイデアの把握を通じてしだいに成長し、すっかり意志の鎮静剤になってしまうので、そのときには意志はなにものにもとらわれずに自分自身を止揚してしまうであろう。[10]

「動因 Motiv」と対比された「鎮静剤 Quietiv」は、動かす／静めるという対比を用いた造語で、後者は必ずしも薬剤を意味するものではないが、世界の現象が人間を突き動かすこともあれば、意志から超脱させて苦しみを緩和することもあるという道筋を示している。『セロトニン』の冒頭においてキャプトリクスは、「前世代の抗鬱剤と異なり、自殺や、自傷行為に走らせることもなかったのだ。キャプトリクスの服用で見られる最も一般的な副作用は、嘔吐と、性欲の喪失、不能などだ」[11]と提示される。性欲を失くしていくという副作用は一方で、ショーペンハウアー思想においては欲望を昇華させる意義も持っているが、作品終結部におけるこの抗鬱剤の再定義は、この小さな錠剤が世界観の刷新につながることを示唆して余りあるように思われる。

> それは白く、楕円形で、指先で割ることのできる小粒の錠剤だ。
> それは創造も変容もしない。ただ解釈するだけだ。決定的だったものを一過性にする。不可避だったものを偶然に変える。生に新しい解釈をもたらす——豊かさに欠け、より人工的で、ある種の厳格さに裏付けられている生。幸福の形も、心の安らぎももたらさない、その作用は別のところにある、それは、生を一連の形式に変え、生を騙すことを可能にしてくれる。ゆえに人が生きるのを助ける、少なくともある一定の間は死なない手助けをする。[12]

キャプトリクスは世界を作り変えるのではなく、形式的なものにする視点を与えてくれる。ウエルベックは「生を騙す」という文学的虚構をも喚起する言葉を用いながら、鎮静剤の作用は「人が生きるのを助ける、少なくともある一定の間は死なない手助けをする」ことであるという認識を示すのである。

ウエルベックの小説世界を、安楽死の誘惑に満ち溢れた世界として見た場合、彼はどのような筋書きによって、またどのようなイメージ群を用いて、それを浮かび上がらせ、またそれに立ち向かおう

---

[10]『意志と表象としての世界 II』（第 3 巻、第 54 節）西尾幹二訳、中公クラシックス、二〇〇四年、二七〇－二七一頁（ショーペンハウアー強調）。
[11] *Sérotonine,* Flammarion, 2019, p. 12.（『セロトニン』関口涼子訳、河出書房新社、二〇一九年、六頁。）
[12] *Ibid.*, p. 346.（同書、二八七頁。）

としているのか。そして世界に跋扈する苦しみに対して鎮静剤となるようなものを、どのように表現し小説技法としているのか――、これが本稿の目指すところとなる。

１．世界と死に抗して――『闘争領域の拡大』、『地図と領土』、『セロトニン』

「向精神薬カクテル」を処方する病院――『闘争領域の拡大』

最初の小説『闘争領域の拡大』はウエルベックが三十代で発表した作品であり、主人公の「僕」は三十になったばかり、「人生経験が少ないせいで、自分はずっと死なないと、つい考えてしまう。人の命がごくわずかになってしまうなんて、ありそうにない。〔……〕ある人生が空っぽで短いということは十分ありうる。日々が空しく過ぎ去っていく。痕跡も思い出も残さない。それから突然、停止する」[13]と想像するような男である。前半の認識は、ウエルベックが自身の老いを十分に意識した近作とは決定的に異なるものであるが、後半における平坦な人生という観点は、彼のほとんどの作品とりわけ『セロトニン』において見られるものであり、それを支えるのがウエルベックの文体を評する際によく使われる、「平坦なエクリチュール écriture plate」[14]である。素っ気ない視線で見られた、意味の欠いた世界――、こうしたヴィジョンは『闘争領域の拡大』の冒頭、あたかもウエルベック自身が小説創作の行程の始まりにあたってマニフェストを語るような記述に、そして物語の終着点、ゆるやかな精神崩壊に陥った主人公が至った、いわば「末期の眼」に確認できるものである。

> 僕の狙いは、より哲学的なところにある。その狙いを達成するためには、逆に無駄をそぎ落とさなくてはならない。簡素にしなくてはならない。たくさんのディテールを一つひとつ破壊していかなくてはならない。〔……〕目下、世界が画一に向かっている。通信手段が進化している。住居の中が新しい設備で豊かになっている。徐々に、人間関係がかなわぬものになっている。そのせいで人生を構成する瑣末な出来事がますます減少している。そして少しずつ、死が紛れもないその顔を現しつつある。第三・千年紀は幸先がいい。
>
> しかしもう随分前から、僕は自分の行為にはっきりとした意味を感じなくなっていた。つまり意味のある行為なんてもうほとんどなかった。ほとんどの場合、僕はとにかく「観察者の立場」にある。[15]

「観察者の立場」はまた後でとらえなおすが、ウエルベックが最初期から人間を希薄化するベクトル

---

[13] *Extension du domaine de la lutte* (1994), J'ai lu, 1997, p. 48-49（『闘争領域の拡大』中村佳子訳、河出文庫、二〇一八年、六一―六二頁）。

[14] 代表的なものとして次を参照。Olivier Bessard-Banquy, « Le degré zéro de l'écriture selon Houellebecq », *Michel Houellebecq sous la loupe*, Rodopi, 2007, p. 357-365 ; Antoine Compagnon, « La langue plate et instrumentale de Houellebecq » (*Le Monde*, 03 janvier 2019).

[15] *Extension*, p. 16, 152-153.（『闘争領域』、二二頁、一九八頁。）

――最初の引用で「死」と称されているもの――へと向かう文明観を背景にしながら、自らの文学を構成していったことについては注目してよいだろう。

それでは『闘争領域の拡大』において、安楽死はどのように描かれているだろうか。それは司祭によって語られる看護師パトリシアの告解である。骨折した老婆を「ベッドの無駄遣い」とする医者たちの命令で、パトリシアは老婆に「向精神薬カクテル」を投与することになる。「それは大量の精神安定剤を混ぜ合わせたもので、即座に安らかな死をもたらす。彼らがそれについて討論したのはたったの二分だった。」[16]　非日常的な「死＝殺人」を「カクテル」という日常的なものと隣接させることで、現代社会の合理主義がもたらす闇を戯画的に暴き出すのは、ある時期までのウエルベックの真骨頂であると言えよう。

「父殺し」の簒奪――『地図と領土』

『地図と領土』の主人公ジェドは、七歳のころに母を自殺で失っている。この事件が、建築家の父ジャン=マルタンと芸術家の息子の間にある空隙となって存在し続けており、クリスマスにだけ会う二人の会食の、光が射さない描写や会話はきわめて印象的なものである。父が直腸がんにかかり死期が意識される中で、ジェドは母の死の謎を父に問いただそうとするが、「俺にも全く分からない」という答えのみである。このような父子関係が物語の中心に躍り出たのはこの作品が初めてであり、以後、『服従』や『無化』で大々的に展開されるが、そこで描かれるのはここにも見られるように、父の死（あるいはその予感）に伴う遺産継承であり、種や生殖、さらには愛を贈与する女性の継承という主題をも導くものである[17]。

医療サービスつき施設に入り、人工肛門をつけてまで生きたくないと語っていた父から呼び出されたジェドは、スイスの団体に安楽死の措置を取ってもらうことに決めたことを伝えられる。「自分にとっては〈人生そのもの〉が快適ではありえない」という父の言葉に、「人生に対して確固とした愛情を抱いているわけではなかった」ジェドは、義務感に訴えることで、カントを持ち出してまで説得を試みるが[18]、「おまえにいったいなんの関係がある」[19]と聞く耳を持たない。続く場面では、ジェドの肖

---

[16] *Ibid.*, p. 139.（同書、一八〇頁。）

[17] 『服従』における父子関係（父の死を契機とした父子の出会い直し）、そしてそれとまったく対照的な母の散文的な死に関して、拙論内で分析したことがある。「ミシェル・ウエルベックとユイスマンス－『服従』における《女性嫌悪》をめぐって」『人文研究』（神奈川大学）第一九六号、二〇一八年、一八－一九頁。一方、『地図と領土』には精子過小症のため子を持たないジャスラン夫妻を家族の理想形として描いている面があり、それは生殖能力を欠損させた飼い犬のミシューの幸福そうな姿に映し出されている。*La Carte et le territoire* (2010), GF Flammarion, 2016, p. 304.（『地図と領土』野崎歓訳、筑摩書房、二〇一三年、二七七頁）。

[18] 自殺を先延ばしすることができる二つか三つの理由を尋ねられたウエルベックは、下記のように答えている。「カントは一七八三年に「徳論の形而上学的定礎」のなかで、自殺をはっきりと批判しています。〔……〕実際の義務を負いたいのであれば、他の存在の幸福があなたの存在に依存しているようにしなければなりません。たとえば、幼い子どもを育てようとするとか、さもなければプードルを買ってみることができます。」*Intervention 2020*, Flammarion, 2020, p. 55.「ジャン＝イヴ・ジュアネとクリストフ・デュシャトレとの対談」『ウエルベック発言集』西山雄二、八木悠允、関大聡、安達孝信訳、白水社、二〇二二年、四五頁。

[19] *La Carte et le territoire*, p. 339.（『地図と領土』、三一五頁。）

像画のモデルとなった（登場人物としての）ウエルベックが惨殺され、葬儀が行われる。そこで父のことを思い返し、ジェドには「父が必ずや安楽死計画を実行するだろうということが突如、はっきりとわかった」[20]のである。ここにはジェドの代父ともいうべきウエルベックの死が、実際の父の死の予兆となるという物語構造が見てとれる。

クリスマスが近づき父のいる施設に連絡をしたところ、所長から父がチューリッヒへ旅立ったことを聞き、手遅れであることを知りながらジェドもまたチューリッヒに向かう。父が依頼したのは〈ディグニタス（尊厳）〉という名の自殺幇助団体であり[21]、（著者としての）ウエルベックはこの本部の建物を付近にあった淫売宿と対比させながら描写する。〈ディグニタス〉本部の、余計な装飾を排した、ル・コルビュジエ的な白いコンクリートの建物は、悪趣味なデコレーションがほどこされていた淫売宿と好対照であり、生涯、こうした合理主義的な建築から距離を置いていた父が最後に見た建物となったという悲劇的状況が喚起されている[22]。また、一日当たり百人の客と、棺を運ぶ係員などが盛んに行き来する建物を前にして、ジェドは「苦痛と死の商品価値のほうが、快楽とセックスのそれを上回ってしまったのだ」[23]と感じる。

遺族の追及に対して、手続きは正常に執り行われたと責任者は返答し、父ジャン=マルタンの最期の様子を伝えるものとして書類を提示するが、「書類一式」とは名ばかりの一枚のみのペーパーのみであった。「スイスの法律を完全に遵守している」と冷ややかに語るこの女性に対して、ジェドは平手打ちや蹴りという「人生で初めての」肉体的暴力をふるったのであった。

ここには、ウエルベックの安楽死「産業」に対する全面的な否定とともに、淫売宿のけばけばした装飾によって示されるような、性の快楽と非合理性の擁護が確認できるだろう。そして「尊厳」という語によって主張される個人主義（「おまえにいったいなんの関係がある」）、死にまで拡大される近代的な思想に対して、一人の生死が当人のみに収まる問題ではないことが示唆されているように思われる。さらに言えば、父を殺すのは息子である自分のはずだったのにそれを果たせなかったという、父殺しを横取りされる物語として『地図と領土』を読むこともできるだろう。代父ともいうべきウエルベックの殺人容疑が当初ジェドにかけられていた点も、この仮説を補強するものとなる。

両方の親を自殺で失うこととなったジェドは、世界から完全に隠遁して創作活動に生涯を捧げ、父

---

[20] *Ibid.*,p. 343.（同書、三一八頁。）

[21] スイスに実在する団体であるが、「尊厳」は人間の尊厳が死の自己決定権であることを示そうとして選び取られた語である。後に見るように、ウエルベックはたびたび「尊厳 dignité」という語や概念に対して批判を行っている。他方、日本での「尊厳死」という語は治療を中止する行為等を指し、医師による致死薬の投与を指すような「（積極的）安楽死」と区別して用いられている点で、両者を区別せずに用いる国際的な用法とは大きく異なるものである。曖昧かつ美しく聞こえる「尊厳」という語によって、延命治療の中止を認めさせようとするイデオロギーを付与された言葉になってしまったと言わざるを得ないだろう。松田純『安楽死・尊厳死の現在ー最終段階の医療と自己決定』中公新書、二〇一八年。「尊厳」をめぐる西洋思想史については以下を参照。マイケル・ローゼン『尊厳――その歴史と意味』内尾太一、峯陽一訳、岩波新書、二〇二一年。

[22] Alcoser, *art. cit.*, p. 79.

[23] *La Carte et le territoire*, p. 339.（『地図と領土』、三六四頁。）

と同じ消化器系の癌にかかったことが判明した最晩年は、放射線治療を受けずに大量の睡眠薬服用とモルヒネ注射によって仕事を続ける。人類全体の消滅を告げるかのような最後の映像作品の描写が印象的な個所だが、その美学を基礎づける「表象」の鎮静効果については、章を改めて考察したい。

生きてあり続けること——『セロトニン』

すでに『セロトニン』における抗鬱剤キャプトリクスが持つ意味について考察したが、この作品においても、主人公フロランには死の影が付きまとっている。酪農家たちのデモにおける、友人エムリックの銃による「劇的な」自殺もさることながら、彼の両親が結婚四十周年記念の日に服毒自殺をしたことは見逃せない。悪性の脳腫瘍が見つかり、極めて低い生存率を告げられた夫に付き従って、健康であった妻も付き従うことを決めたのである。

> ロマンティックな恋人たちには第三の解決策があった。人間の能力を超える不死を信じ込んだり、それと同じくらい疑わしい天上のエルサレムの物語を鵜呑みにしなくてもすむ。すぐに実行可能で、ハイレベルの遺伝子学研究も永遠への誠実な祈りも必要ない。それは、今から二十数年前にぼくの両親がとった解決策だった。[24]

両親がとった解決策は、『素粒子』や『ある島の可能性』で描かれるクローン技術でもなく、『服従』で可能性が示唆される宗教でもない、まさしく第三の道であり、苦難に満ちた生に対してどのように立ち向かえばよいかという、ウエルベック自身による検討の道筋を示すもののように思われる。それは一方で「狂気の愛を生きていると思わせるところは何もない」「ふつうの」人たちがとった方策であり、SF や天才科学者といった特殊な設定を少なくしていく、ウエルベックの近作の傾向に合致するものと言えよう。

他方、両親の死の描写について言えば、「憲兵士官は、両親は速やかに死に至ったと言ってぼくを安心させようとした。早かったかもしれないが、瞬時ではなかったのだろう、ベッドでの姿勢を見ると、両親は最後まで手をつないでいようと試みたのだろうが、苦痛のために痙攣し、手を離していた」[25]という描写にあるように、心中を究極の愛とするようなロマンティズムに流されず、『闘争領域の拡大』以来の、死を脱神話化する視点はなお維持されているのである。

終盤、フロラン自身の症状は悪化の一途をたどり、これぐらいの抑鬱のレベルであれば、ベルギーやオランダに行けば安楽死を認められるほどでしょう、私は医者なので勧めませんが……と医師から言われる。このアゾト医師は、治療のためにエスコートガールを勧めるような奇矯な人物であるが、性欲が鬱の防波堤となりうることを無視せず、「わたしは死を良いものだとは思っていないんです。死は、原則的には好きではないんです」と言う。このような真率な物言いをする彼に対して、フロラン

---

[24] *Sérotonine*, p. 79.（『セロトニン』、六三頁。）
[25] *Ibid.*, p. 81.（同書、六四頁。）

は感謝と称賛を覚えるが、それを表現する言葉は出てこない。

実際、キャプトリクスは性欲減退を代償にした抗鬱剤であり、これが今までのウエルベック作品の一大特徴であったエロスによる解決を阻むものとなっている。フロランは飛び降り自殺を考えるに至る。

> ぼくは、建物の前にあるコンクリートの広場を目にして足がすくまないよう、夜にことを行うつもりでいた、自分自身の勇気にはそれほど自信がなかったのだ。〔……〕ぼくは落下中の時間を案じて二の足を踏んでいた、何秒間も宙に浮いていることを想像する、衝撃の瞬間に内臓破裂するのは避けがたく、極度の苦痛がぼくを貫くと徐々に意識するだろう、落下中毎秒ひどい恐怖に襲われ、恩寵により幸い気を失ったとしてもその苦痛は緩和されたりはしないのだ。[26]

この後で彼は、地面にたたきつけられるまでの時間を物理学的に計算し、きわめて短時間で済むという答えを得るのだが、一方で生きながらえることの苦痛、他方でそれを避けるための自殺の直前に押し寄せる恐怖を秤にかけて、抗鬱剤で支える緩慢な死か、自殺を選ぶのかは、結末においてもあいまいとなっている。最後のキリストの言及からは、先述の第二の道――宗教の道――もほのめかされていると言えるが、この主題は『無化』において変奏されていると見ることもできよう。

２．クローン技術は生を超越するか？

第 1 章では『闘争領域の拡大』、『地図と領土』、『セロトニン』における安楽死や自殺に対する想念を中心に分析することで、苦難に満ちた世界、さらに言えば現代西洋文明に対して、大きな失望を感じながらも安楽な死を選ばないという主人公たちの道筋を確認することができた。一方、ウエルベックの作品群の中で、生を超越しようとする手段としてクローン技術に可能性を見出す二つの作品が存在する。『素粒子』、『ある島の可能性』の二つであり、前述の第一の道――「人間の能力を超える不死」の信仰、「ハイレベルの遺伝子学研究」――に可能性とともに限界を見出した作品と言える。

苦しみの終止符？――『素粒子』

この作品においても、二人の主人公ミシェルとブリュノが愛した女性たちは自殺を遂げる。両足が麻痺し世話されることを苦にしたクリスチヤーヌ[27]、そしてミシェルとの子を待ち望みながら子宮がんの転移が見つかった、アナベルの自殺である。昏睡状態の彼女を前にしたミシェルは「これまでのなりゆきを振り返り、いかなる段階を経て自分たちの人生が破壊されたのか、そのメカニズムを考え

---

[26] *Ibid.*, p. 342.（同書、二八四頁。）

[27] 語り手は「爆弾テロに巻き込まれたらどうするか」という質問に対して、訊かれたほぼ全員が「不具になったり、あるいは顔形が変わったりするよりは即死する方がましだ」と答えたという挿話を挙げて、「彼らにとっては死でさえもが、体の機能を失って生きることほどはむごくないと思えるからなのだ」と推測している。*Les Particules élémentaires* (1998), J'ai lu, 2000, p. 248.（『素粒子』野崎歓訳、筑摩書房、二〇〇六年、二七二－二七三頁。）

てみた。すべてはどうしようもなく、澄明かつ反論の余地なきものであるように思われた。すべては限定された過去の明証性を帯びてびくともしないように思われた」[28]と語られる。この世の当然の帰結としての苦しみという認識に対して、ミシェルは仏教の瞑想書の章句、そして自らの詩によって、このような苦悩からの解放を祈るのである。

> われらの体は冷たくなることだろう、そしてただ
> 草の中にのみ存在するだろう、わがアナベルよ
> それが個人という存在の虚無であるだろう
>
> われらは人の姿のもと
> 愛すること少なかった
> おそらくは太陽が、墓に降る雨が、風が、霜が
> われらの苦しみに終止符を打つことだろう。[29]

散文とその中に差し込まれる詩という独特な形式は、『ある島の可能性』にも継承され、ウエルベックにおける世界を鎮静させる技法のひとつとして考察することも可能かもしれない。ここではミシェルこと科学者ジェルジンスキが、論文「完全な複製のためのプロレゴメナ」を残し、すべての動物種がクローン操作によって複製可能な、不死なる種として生まれ変わることができる理論を証明することになった、という筋書きに注目しよう。

この理論により「人類は消滅しなければならない」「人類は新しい種族を生み出さなければならない、それは性別をもたない不死の種族であり、個人性、分裂、生成変化を超克した存在であろう」という思想が提起される。これに対して、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教やヒューマニズムの信奉者たちは、「人間の尊厳」を盾にとり反対を表明したが、仏教徒のみが反対を表明しなかったという挿話は[30]、解脱や涅槃へと向かう思想との近似性を示すものとして、『ある島の可能性』において展開される論点である。

ウエルベックはこうしたクローン技術にどのような期待を持っていたのか。たしかに、『素粒子』の最終盤で謳われるのは「本書の究極の野心は、われわれを造り出した幸薄い、しかし勇気ある種族に敬意を表することである」という宣言であり、個人主義、エゴイズム、暴力に彩られながらも、善と

---

[28] *Particules,* p. 282.（『素粒子』、三一〇頁。）

[29] *Ibid.,* p. 286.（同書、三一五頁。）

[30]「実際、『素粒子』のミシェル・ジェルジンスキが主張するように、仏教のみならず、宗教でも哲学でも真摯なものならすべて、欲望が「苦痛、憎悪、不幸の源泉」という結論に至るとされるのである。そして、仏教が、ジェルジンスキの提案する人間の苦しみを遺伝子操作で解決することを非難しない唯一の宗教であることに注目すべきだろう。」Douglas Morrey, *Michel Houellebecq : Humanity and Its Aftermath*, Liverpool University Press, 2013, p. 148.

愛を信じることをやめなかった人類への、未来からのオマージュである[31]。一方で、「技術の慰め」(2002)という、『素粒子』と『ある島の可能性』の発表の間に挟まれた論考では、次のように語られている。

> 私は可及的速やかに自己のクローンを作るつもりだし、もちろん、誰もがそうすることだろう。〔……〕すでに壮年にある私は、責任ある父親として振る舞うことだろう。自分のクローンには優れた教育を保証する。そのあとで私は死ぬ。死ぬことに喜びはない、私は死にたくないのだから。しかし、反証が挙がるそのときまで、私は死ぬことを余儀なくされている。クローンを介することで、ある種の死後の生に到達することができよう——これでまったく充分だというのではないが、子供がもたらしうるであろう死後の生よりはましなものだ。[32]

クローンがもたらす死後の生の可能性を示すとともに、父子関係という人間的枠組みとの類推から考察する点、そしてこの論考の最後に、クローンもまた「死にゆく定め」をもつことを強調する点においては、ウエルベックの態度はアンビバレントなものと言わざるを得ないだろう。

「煩悩の滅却」を超えて——『ある島の可能性』

『ある島の可能性』は『素粒子』のエピローグで言及されたクローン技術が実践され、ネオ・ヒューマンが中心となった時代から、ダニエル 24 そしてダニエル 25 が、彼らの始祖となる主人公ダニエル 1 が残した人生記を読み進め、注釈を付していくという構成の物語である。冒頭、ダニエル 24 が語るのは、生も死も感情も存在しないネオ・ヒューマンの生活様式である。

> 我々にはもはや、いかなる目的も割り振られていない。人間の喜びは我々にはわかりようがない。また、その不幸が我々を傷つけることもない。我々にとって夜はもはや、恐怖に打ち震えるものでも、エクスタシーに打ち震えるものでもない。それでも我々は生きている。人生を送っている。喜びもなく、謎もない。時の流れは、我々には遠く感じられる。
>
> 文明の推移から生じる
> 著しく決定的な
> ゆるぎない恩寵には、
> 必然として死が存在しない[33]

このような未来の姿は一方で、『闘争領域の拡大』における「平坦な生」を引き継ぎつつ、生が消尽していく『セロトニン』を予告するものであり、いわばネオ・ヒューマン期以前においても見られる、

---

[31] *Particules,* p. 316.（『素粒子』、三四八頁。）
[32] 「技術の慰め」*Interventions 2020*, p. 211.（『発言集』、一五七頁。）
[33] *Possibilité*, p. 13, 15.（『ある島の可能性』、七、九頁。）

現代社会の非人間的な寒々しい状況を映し出しているとも言える。ダニエル 24 が想起するのは、2003 年夏にフランスで実際に起こった事件、猛暑のなかで十分に介護を受けられなかった高齢者が大量死した事件である。彼によれば、現代国家にもかかわらずこのような事件が起きたのではなく、真の現代国家だからこそ、老人を完全にゴミ扱いすることができたのであり、その後の数十年で、第三者あるいは本人の意志による安楽死が発展し、こうした問題は解決したという「歴史」（読者から見れば予想）が示されるのである[34]。

一方、ネオ・ヒューマンには死がないとはいえ、体力は衰え、次世代のネオ・ヒューマンへの遺伝子コードの複写が起きる。ダニエル 25 への「移行」にあたって、ダニエル 24 は「自分はこれといった後悔も残さず、実質的な喜びのなにひとつなかった生活に別れを告げるだろう。我々ネオ・ヒューマンは、臨終について、まさにスリランカの仏教経典に書かれているような、小乗仏教の修行僧たちが求める境地に達している。我々の生命は消滅のとき、「蠟燭が吹き消されるように」消えるのだ」[35]と記す。再び仏教との連関が語られるとともに、ショーペンハウアーが唯一認める自殺のヴィジョン——生きようとする意志を完全になくした餓死——との近似性も認められるだろう[36]。「悪寒はますます激しくなる。束の間、ほとんど印象のない思い出が蘇り、それから消える。〔……〕心の活動も消える。おそらくあと数分のことだろう。なにも感じない。ほんの少し悲しいだけだ」という第 1 章の末尾は、それを物語るものである[37]。

他方、『ある島の可能性』においてクローン技術を先駆的に活用するのは、仏教徒ではなくエロヒム教団という新興宗教である。好奇心からこの宗教に興味をもったダニエル 1 は、預言者殺害とそのクローンの復活という「儀式」、そしてエステルへの失恋と元妻イザベルの自殺、飼い犬フォックスの死を経て、自らの遺伝子コードを捧げる決意をする。DNA 採取に続く儀式は、「再生への待機の開始——またの名は自殺」[38]とされ、実際にダニエル 1 は自殺することとなる。一方、ダニエル 25 はネオ・ヒューマンから離れ、ダニエル 1 がかつて生きた場所へと旅立つ。ここには、ダニエル 1 に代表されるヒューマンなるものへの希求が認められる。

仏教で言うところの「煩悩の滅却」の実現を目指していた〈至高のシスター〉は、ネオ・ヒュー

---

[34] *Ibid.*, p. 88（同書、八〇頁。）

[35] *Ibid.*, p. 157.（同書、一五〇頁。）

[36] 仏教を作品内で肯定的に扱っていることを訊かれて、ウエルベックは答えている「私を仏教に導いたのはショーペンハウアーではありません。むしろ『チベット死者の書』の読書が私に強い印象を与えたのです。〔……〕彼自身は実際には仏教をよく知らなかったのです。彼はヒンドゥー教の文書を読みました。当時は翻訳がほとんどなかったため、より多くの文書を理解するために、彼は晩年になるとサンスクリット語を習得しようと努力し、ブッダの手法でヒンドゥー教の文書を解釈したのです。つまり、彼はブッダが辿った道程を、西洋哲学という別の土台から出発して辿り直したと言えるのです。ショーペンハウアーの哲学はごく自然に仏教へと導かれているのです。」「アガト・ノヴァク＝ルシュヴァリエとのインタビュー」*Interventions 2020*, p. 363-364.（『発言集』、二七七－二七八頁。）

[37] *Possibilité*, p. 157.（『ある島の可能性』、一五〇頁。）

[38] *Ibid.*, p. 332.（同書、三一九－三二〇頁。）

マンの活力が、感情ではなく、純粋に思考（迅速さでは劣っても、より明晰であるがゆえ、より正確な思考。つまり解脱した思考）の継続に必要なだけの微弱な値で維持されることを期待していた。しかしこの現象はほんの小さな規模で起こったのみだった。逆に、受肉を十分に果たせなかった我々の世代をすっかり飲み込んだのは、わびしさや、メランコリー、物憂げな、ついには死に至らせる無気力だ。その失敗を示す最も顕著な例として、僕はついにダニエル 1 の運命、その矛盾をはらんだ極端な道のり、彼を揺さぶった愛の情念を（彼の苦しみ、その悲劇的な結末がいかなるものであろうとも）、羨むようにさえなった。[39]

ネオ・ヒューマンを支配する「わびしさや、メランコリー、物憂げな、ついには死に至らせる無気力 la tristesse, la mélancolie, l'apathie languide et finallement mortelle」に対して、ヒューマンを揺さぶった「愛の情念 les passions amoureuses」、「苦しみ souffrances」の方を羨む立場への変容は、ウエルベック自身のクローン技術に対する態度の変容を意味するのだろうか。「煩悩の滅却 l'extinction du désir」を目指すベクトルは、以後の作品では『セロトニン』における抗鬱剤による消尽に向かうベクトルに見え隠れするものの、仏教が明示されることはほとんどなくなったように思われる。一方、『無化』においては仏教的・ヒンドゥー教的な転生のモチーフは、ウイッカと呼ばれる、古代の多神教的信仰に基づいた復興異教主義における「再生 réincarnation」として、文字通り復活することとなる。ウエルベックにおける生の超越という主題は、さまざまな宗教的背景と重ね合わせられながら描き続けられているものであり、そこには現代社会における安楽死の誘惑との絶えざる闘いが確認できるのである。

３．鎮静の詩学

ここまでウエルベックの代表作における安楽死の描写や、それをめぐる思索に焦点を当ててその展開を追ってきたが、この章ではこうした思想を背景にして生まれた小説技法に注目したい。最新作『無化』に見出された特徴から、それまでの作品群において見えにくかった点を浮かび上がらせることが、本稿の最終課題となる。

観照と表象

「観照 contemplation」は世界に対して注意深く観察し、没入することを意味し、転じて瞑想や、宗教的な文脈では神との魂の交感をも含意する言葉である。この概念は「表象」という語とともに、最初期のエッセイ『生きてあり続けること』にすでに見られるが[40]、そこにはショーペンハウアーの影響が認められる[41]。『ショーペンハウアーとともに』においては、次のような引用とそれに関するウエル

[39] *Ibid.*, p. 405-406.（同書、三八八－三八九頁（訳語を変えた部分がある）。）

[40] 「世界の新たな表象に物質を与えることができるのは、詩という場所なのであり、世界を直視し観照することによるのと同じくらい、そして古の哲学にさかのぼるよりもはるかに多くのものを得ることができるのだ」*Rester vivant* (1991), Flammarion, 2010, p. 25.

[41] Pierre Dos Santos, « Une éthique de la contemplation », *Cahier Michel Houellebecq*, Agathe Novak-Lechevalier (éd.), L'Herne, 2017, p. 222-225.

ベックの注釈を読むことができる。

> 見渡す限りの地平線、空には雲ひとつなく、そよとも風が吹かぬなか、草木もなびかず、獣も人もおらず、流れる水もない、ただ深い静寂が支配する荒涼とした土地にいると考えてみよう。このような環境は、私たちにあらゆる意欲とその凡庸さを離れ、ひたすら厳粛な気もちで観照するよう呼びかけているように思われるだろう。だが、荒涼で平穏なこの風景に崇高な味わいを与えるのは、すべての意欲とその凡庸さを断ち切った観照の態度なのだ。

〔……〕平穏で、一切の反省、一切の欲望、また世界の他の事物とも切り離された形である物を眺めること、これこそがショーペンハウアーの言う観照であ〔る〕。[42]

理性的反省も欲望も交えず、事物どうしの連関性から解き放たれた形でひたすら事物を見つめることが観照であり、ショーペンハウアーの哲学によるなら、生きようとする意志からの解脱をひと時でも可能にする「祝福」された瞬間とされる[43]。そしてそのように見られた風景として例に挙げられているのが、人気を離れ、人間の意味づけるような視線も寄せ付けないような、荒涼で崇高な風景なのである[44]。このような視線を獲得する術は教えられるものではなく、ウエルベックの解説の言葉を借りるならば、「木偶の坊のように世界を受動的に見つめることができる気質」であり、「芸術家とは、無為であったり、世界にひたすら浸りきったり、そぞろな夢に身を委ねさせたりすることで満足できる人間」[45]に他ならない。

この美学が作品内で、さらには作品内の芸術家像を作り上げるのに十全の形で展開されたのが、『地図と領土』である。この作品名は、芸術家ジェドが行った展覧会のタイトル、「地図は領土よりも興味深いLA CARTE EST PLUS INTÉRESSANTE QUE LE TERRITOIRE」に由来するが、ミシュランの地図を撮影したものを引き延ばした作品のみならず、世界を意味づけずに見て、あるがままに受け容れるという、ジェドの一貫した創作活動の美学（「世界に関する表象の生産」[46]）を示している。「私はただ世界を説明したい……、私はただ〈世界を説明〉したいのですJe veux simplement *rendre*

---

[42] *En présence de Schopenhauer*, L'Herne, 2017, p. 43, 50.（『ショーペンハウアーとともに』澤田直訳、国書刊行会、二〇二一年、五七、六五頁）。前者の引用元は、『意志と表象としての世界 II』（第 3 巻、第 39 節）前掲書、八二頁。）

[43]『意志と表象としての世界 III』（第 4 巻、第 68 節）前掲書、一九〇－一九一頁。

[44]『ある島の可能性』の舞台の一つともなる、大西洋に浮かぶランサローテ島の次のような描写も参照。「私たちは完全に岩石からなる荒れ地を見下ろしていた。目の前には、幅何十メートルにも及ぶ巨大な断層が広がっていて、地平線の彼方までうねりながら、地殻の灰色の表面を切り裂いていた。絶対的沈黙が支配している。こんな風なのだろう、と私は思った。滅びてしまったのちの世界とは。」（*Lanzarote* (2000), *Houellebecq 1991-2000*, Flammarion, 2015, p. 1053.『ランサローテ島』野崎歓訳、河出書房新社、二〇一四年、三五頁）

[45] *En présence de Schopenhauer*, p. 39.（『ショーペンハウアーとともに』、五二頁。）

[46] *La Carte et le territoire*, p. 66.（『地図と領土』、二七頁。）

compte du monde」[47]とつぶやくジェドが作り上げたのは、数々の工業製品が繁茂する植物のなかで分解していく映像であり、まさしく人間が介在することのない、ありのままの世界の勝利の姿だと言える。そしてこれが、ジェドにとって悲しみに満ち溢れた世界から受ける痛みを鎮める技法だったのである。

『無化』は経済相の顧問を務めるポール・レゾンの周囲で起こる、陰謀論的と言ってもよい政治サスペンスと家族劇が複雑に織りなされる長編小説であるが、本稿では後者に焦点を当てたい。ポールと彼のパートナーであるプリュダンスは、家庭内別居をしているように危機が慢性化していたカップルであったが、そんなさなかポールの父エドゥアールが脳卒中に襲われ危篤に陥る。子どもたちは集まり、ポールは昏睡状態の父に語りかけ、敬虔なカトリック教徒である妹セシルは祈る。医師たちの予測に反して奇跡的に父は息を吹き返すが、全身不随の父に対する医療現場の状況が描かれていく……というのが作品の序盤である。『地図と領土』で父（殺し）を自殺幇助団体により横取りされた息子が、父を取り戻す物語としても読むことができ、父エドゥアールが就いていた国内治安総局（DSGI）の職務が、テロ事件対応に巻き込まれていた息子ポールに引き継がれる格好となる点からも、このことは明らかであろう。

ほとんどの作品で男性独身者を主人公とし、その孤独な心象風景を描いてきたウエルベックが、周りにいる一人ひとりを詳細に描き、彼らの間でのコミュニケーションの回復を描いたとも評価される作品だが、その実態はどのようなものなのか。それは、父に寄り添い同室介護をする伴侶マドレーヌが見出したものに、典型的に表されているように思われる。

> 夜、医療用ベッドに自分のベッドをくっつけて、彼女はエドゥアールを手で支えられるようにした。彼の指はさまざまに動き、その動きは明確で、それはいまや言語と言ってもよいものだった。といっても一語一語に翻訳できるような言語ではなく、概念よりも感情を表現し、分節言語よりも音楽に近いものだった。[48]

ウエルベックにおける、意識をほぼ失った全身不随の人間に対しても交流が成り立つという確信とともに、これが特殊な状況によるものではなく、これこそ人間の本質的な交感の形であるという認識が垣間見られるところである。終盤、今度はポール自身に悪性の腫瘍が見つかり、関係を取り戻したプリュダンスとの最後の日々が描かれるが、そこで重要なのは性的快楽であって、「逆に全く重要でなかったのは、言葉であった。丸一日、来る日も来る日も一言も交わすことのない日々を過ごした」と語られるのである[49]。

このような沈黙のコミュニケーションを最も雄弁に伝えるのが、登場人物たちの観照の視線と、それが見つめる風景である。それはまず、父エドゥアールによってもたらされるものである。

---

[47] *Ibid.*, p. 406.（同書、三八四頁。）
[48] *Anéantir*, Flammarion (Kindle 版), 2022, p. 400.
[49] *Ibid.,* p. 553.

> 空間のどことも分からない一点を見つめるこの視線、何かを見ているのだが何も表すことのなくなった眼は、不安をかきたてること限りなく、父が純粋な知覚状態 perception pure に入り込んだかのようで、感情の迷宮から切断されたかのようであった。しかしポールは思い直した。そんなわけはない、父は感情を感じる力をいささかも失ってはいないはずだ。たとえそれを表わす状態にはなくても。[50]

> プリュダンスの父親が波の動きを見つめていた contemplait ように、ポールの父は風に揺れる枝の動きを見つめていた。それらはたぶん、人間が祖先から心に描いてきたものに根拠があるわけではないだろうし、人類の本質にある神話に結びついているようなものでもないだろう。けれども、そうしたものより多様であり、繊細で甘美なものなのだ。[51]

安楽死を擁護する立場とは大きく異なり、たとえそう見えなくても、重度の障碍をもった人間は外界からの感覚刺激を受容しているのであり、この点で世界との交感は成立しているという認識が示されている。そしてこのような感覚を与える風景は、大自然であったり崇高なものであったりする必要はなく、フランスの地方のどこにでも見られる、まったく日常的なものであるのが特徴的である。これは『ある島の可能性』の最終盤やショーペンハウアーの観照論で見られたような、人間的なものを欠いた荒涼とした風景とも、また『闘争領域の拡大』において主題化されていた、現代社会の平坦な世界とも異なるものとなっている。

そして不治の病に陥ったポールとそれに寄り添うプリュダンスもまた、苦しみに満ちた世界、そして死を超脱するのを願うかのように、次のような光景を見つめる。

> 森は静かな息遣いをするかのように生気あふれる様子をしていた。それはいかなる動物が息をするよりも限りなく穏やかな息であり、感情の揺れ動きも、いかなる感傷も超え出たものであった。純粋な鉱物とも異なる、より壊れやすく柔らかいものであり、物質と人間のあいだにあるような中間のもの、本質上、生であるもの、平穏な生、闘争も苦痛も知らない生なのだ。森が喚起するものは無限ではないが、それで何の問題があろうか。森を見つめること contemplation に没入していると、これに比べて、死などはるかに些末なものに見えてくるのであった。[52]

「生気あふれる animée」や繰り返される「生 vie」という語によって、死と比した生の豊かさが強調さ

---

[50] *Ibid.,* p. 106. 次も参照。「父は日々の大半を温室で過ごし、風景を眺める contempler のだが、彼よりも活発な生活を送っているような人々には見逃されるような、日々起こる微妙な変化を感じているにちがいなかった。」（p. 400）

[51] *Ibid.*, p. 401.

[52] *Ibid.*, p. 541.

れているように一見思われるが、ここで描かれている「生」は無限の広がりを示すのではなく、つつましく有限なものにとどまっており、平穏でか細く、動物的であったり鉱物的であったりするよりは、植物的なものであるのが特徴的だろう[53]。

世界の苦しみを鎮めるものとして、世界をありのままに見るという観照という枠組みは『無化』に至るまで維持されていることが確認できた。一方、見つめられる風景の内実は、近作において特に大きな変容が起きていることにも注目しなければならない。反出生主義からいわば 21 世紀のロマン主義への転回に見えなくもないこのような変容については、本論で触れることのなかったテロリズムや「カルト」も含みこむ政治策謀劇と合わせて『無化』を考察したうえで、検討する必要があるだろう。

夢を見る人

ウエルベック作品における鎮静剤の機能を果たすもう一つの技法は、「夢」かもしれないという仮説を提示して本論を終えたい。『無化』において夢が多く出現していることについてはすでに指摘があるが[54]、まずは作品ではなく、序で示したヴァンサン・ランベール事件についての彼の論考に注目しよう。両親の許可を得ず栄養補給を停止したことへの批判だけでなく、病院側が彼に許さなかったと思われる外出は「感覚刺激の積み重ねによって、患者の神経機能の回復を助けうるものである」という見解も示され、先述の『無化』の物語に組み込まれただろうことがうかがえる。そして、「目覚めているが答えない」人々（かつて「植物状態」と言われていたが、安楽死を正当化するような語感を与えることを避ける医師たちが用いると『無化』で示されている[55]）について、次のような思いをめぐらせている。

> 睡眠と覚醒のサイクルはあっても、彼らが夢を見ているかどうかは誰にもわからない。夢でできた人生は、私から見ると、すでに生きるに値するものだ。本を書こうとしたことのある人なら誰でもこのことは知っている。つまり、ときには、そして部分的には（私はこの「ときに」と「部分的に」を強調する）、他の方法では伝えられないようなことを、文章を通して伝えることができる。私たちが書くものとはしばしば、私たちが書こうと想像したことのかすかな残響にすぎない。要するに、もっと乱暴に言えば、人間の内的生活というのは、周囲の人々との関係に還元されるものではないのである。[56]

---

[53] ノヴァク=ルシュヴァリエは『ウエルベック、慰めの技法』において、主人公たちが結末に見る風景を論じているが、特徴として例示していたのは、灰色で一様の世界、あるいは海や空が混然一体となる風景であった。一方、別の個所ではウエルベックにおける「アクセス可能な無限の観念」（『ある島の可能性』）を指摘しており、この考えは本稿が示す観点と近いもののように思われる。Novak-Lechevarier, *op. cit.*, p. 264.

[54] Jean Birnbaum, « Michel Houellebecq : « C'est avec les bons sentiments qu'on fait de la bonne littérature » » (*Le Monde*, 30 décembre 2022).

[55] *Anéantir*, p. 103.

[56]「ヴァンサン・ランベール事件は起こるべきではなかった」*Interventions 2020*, p. 443-444.（『発言集』、三四五頁）。昏睡状態にある患者が夢を見るかについては、『無化』においても触れられている。「それは本当のところ誰にも分からない。彼が会った医者は訊くと誰もが次のように言うのであった。それはアクセス

論を組み立てなおすと、「人間の生活は周囲の人々に話しかけることに還元されない」→「他の方法では伝えられないようなことを、文章を通して伝えることができる」→「しかし、このように書かれるに至った文章であっても、実際には書こうと想像したことの一部にすぎない」→「想像は夢によって構成される」→「したがって、夢を見ることは人生において重要であり、生きるに値することである」、という流れの方が分かりやすいであろう[57]。周りの呼びかけに応答しなくても、外界の感覚刺激を無言のうちに受容し、夢をみることが生きることであるという主張が、彼自身の文学創作と重ねあわされて訴えられている点は重要である。

夢や幻想といった要素が、今までのウエルベック作品に見られないことはなかった。『闘争領域の拡大』であれば、シャルトルの大聖堂の上を飛ぶ夢や、目覚めた語り手が、自らの目を刳り貫く妄想ののちに、鎮静剤を飲み落ち着くという幻想的な場面[58]が挙げられるだろうし、『素粒子』であれば、剃刀を振りかざす革ジャンの若者たちに襲われる夢[59]など、その多くは悪夢として作品内で機能していたと言ってよいだろう。

このような夢の使用法が変わるのは、『セロトニン』からであるように思われる。『セロトニン』は物語全体が、過去に出会った女性たちをめぐる苦い回想によって構成されており、時折そこには幻想といった要素も認められるが、次のように夢と恋愛とを結びつける記述も見られる。

> 眠りと恋愛を比較してもそれほど間違いではないと思う。愛は二人で見るある種の夢のようなもので、確かに個人で夢を見る時間もあり、巡り合わせとすれ違いの小さい遊戯はあるものの、愛がぼくたちの現世での存在を耐えられるものにしてくれる、本当のことを言えば、それしか手段はないのだ。[60]

ある種シュルレアリスム的な美学とも言えるが、この世界での苦しみに対する鎮静剤という意味付けは一貫したものとなっている。別の個所では、カミーユとの恋愛を想起して、「毎週金曜日の夜二人で行く場所がオーベルカンフのタパスバーではなく一九〇〇年代の古びたブラッスリーであることだとか。それはぼくたちが生きようとしている夢を暗示しているように思われた。外の世界は辛く、弱者には容赦なく、約束はそこでは決して守られず、愛は、おそらく唯一の、信じるに足りるものだったのだ」[61]と語られる。苛烈な外界と、二人が共有する内なる夢の世界の対比が色濃く浮かび上がり、孤

することのできない心的領域です、と。」*Anéantir*, p. 69. p. 107 も参照。

[57] ウエルベックの文章において、「周囲の人々との関係に還元されるものではない」ことが最後に来ているのは、その次の段落で、ヴァンサン・ランベール事件を「家族の悲劇」（妻は栄養補給停止に同意した）と解釈したり、彼の「尊厳」を盾に取ったりするような動きを牽制するという理由であろう。

[58] *Extension*, p. 141-142, 143.（『闘争領域』一八三、一八五ー一八六頁。）

[59] *Particules,* p. 238.（『素粒子』、二六一頁。）

[60] *Sérotonine,* p. 165.（『セロトニン』、一三四頁。）

[61] *Ibid.*, p. 180.（同書、一四六頁（訳語を変えた部分がある）。）

独な男性主人公が夢の共有によって解放される契機が暗示されているのである。

このような夢や幻想というモチーフは、『無化』においてどのように展開しているのか。それはまず、欲望という形で表されているように思われる。全身麻痺の父、そして不治の病に陥った息子もまた、現実的であるかどうかはさておいて性欲と重ね合わせられて表現されている。ただしそれは、これまでのウエルベック作品に特徴的であった、過激かつ依存的な性表現とは異なった形で描かれている。

> ポールは全身不随者も勃起することを思い出した。もうよく覚えていないが、自由意志による動きはできないけれども、勃起はまったく意志的な運動というわけではない。思考と同じく、垂直的なものなのだ。もし父が勃起できるのなら、文章を読んだり風に揺れる葉っぱの動きを見つめたりする contempler ことができるのなら、父の人生には何も欠けるところがないのではないか、とポールは思った。
>
> こうした状況で、セックスをするのはあまり予想がつかないことに思われた。しかし彼〔ポール〕は、今までとほとんど変わらない形で勃起したのだ。ペニスは彼の健康状態などいささかも考慮していない様子で、今までに貸した金を返すよう要求するかのように、それ以外の体とはまったく独立した生を生きるかのようであった。[62]

ショーペンハウアー哲学における「性欲」——生きようとする意志に盲目的に突き動かされる暗い欲望——とは別の形で、性交の成就というよりも勃起という生理現象を主題としている点が興味深い。たしかにここには相手との目に見えるコミュニケーションは存在しないかもしれないが、疎外や女性の側からの一方的な贈与というディスコミュニケーションもまた存在せず、ただあるのは一人ひとりの夢や幻想が、無言のうちに共有される可能性である。世界をありのままに見るという「観照」とは一見矛盾するかのような「夢」というモチーフもまた、これからのウエルベック作品において、世界の苦難を緩和する鎮静剤として機能していくのかどうかが問われるところである。

結びに代えて

以上、本稿では安楽死という観点のもと、ウエルベック作品における安楽死・自殺の描写やそれにまつわる想念を分析することで、ウエルベックが一貫して安楽死を現代文明——個人主義、資本主義、自律と「尊厳」——の所産として批判し続け、それに抗する筋書きやイメージ群——平坦な生（『闘争領域の拡大』）、性の快楽と相続（『地図と領土』）、消尽（『セロトニン』）——を提示していたことを示した（第 1 章）。その中でクローン技術は死を超越しうるものとして、仏教的な背景を重ねることで可能性が検討されたが、『素粒子』『ある島の可能性』を経て描かれたヴィジョンは、ネオ・ヒューマンによる、かつてのヒューマンの世界への憧憬であった（第 2 章）。最後に、近作の『無化』や『セロト

[62] *Anéantir*, p. 371, p. 519.

ニン』において前景化してきた「観照」や「夢」というモチーフを通して、ウエルベックがいわば市井の人々が生きる世界において、この世の苦しみを超脱するような幸福な一瞬を描こうとしてきたことを示した（第 3 章）。

ウエルベックが自らの作品を世界の鎮静の試みとしてきたことは変わらず、そこにはショーペンハウアー哲学の影響が常に見られるものの、時期に応じてその解釈は大きく変容してきたと言える。初期の詩作やエッセイに見られるように、影響を隠すことなく反時代的な形で苦しみを訴えるところから始まって、『ある島の可能性』に至るまでの小説作品における現代文明への呪詛、『地図と領土』と『セロトニン』、『無化』における、世界との独特の距離感も含みこむショーペンハウアー的「観照」及び「消尽」の美学の表現など、数多くのヴァリエーションが存在する。

本稿では鎮静の技法として観照と夢の二点を考察したが、ユーモアや虚構＝フェイクという視点がもたらす可能性、そして散文と詩の関係についてはとりあげられなかった。観照がレアリスム・散文というメディアによってなされるのであれば、詩は構造や幻想という枠組みと親近性を持つために、本論で提示した夢の問題系と接続する可能性があるだろう[63]。これまでのウエルベック受容が特に日本では小説作品に偏っており、フランス文学研究の内側でほとんどなされてこなかったことをふまえ、詩作品や写真をはじめとする映像作品、「介入」と題された論説などを、現代フランスの社会状況や言説群を参照しながら考察することを今後の課題として、筆をおきたい。

[63]『生きてあり続けること』ではボードレールを範にとって、「構造は自殺から逃れる唯一の手段である。また自殺は何も解決はしない」としている。*Rester vivant*, p. 17.